

六月二日

松崎町行。朝八時前新宿待合わせで、西口地下のコーヒーショップで時間つぶし。つぶせる時間があるのに顔がゆるむ。

Aアーキテクト・ビルダー コース

B 生活環境情報コース

Aは独自の工務店経営者育成。Bは、例えば映像作家、編集者育成を目指す。この二つのコースを研究室本来の建築家育成の他に設ける。

大学院、プログラムの設計。

昼前、松崎町着。伊豆の長八美術館前に総勢二二名程が集まる。新しい道と古い道の話をした後、森文の実測を始める。すでに作られたモノへの畏敬、すでに在るモノの尊厳といった事を感じてくれれば良いのだけれど。牛原山サイドの蔵の内部は実にしっかりしていて、ここはコンピューターを使うのにはモデルになるだろう。二部屋は確保できる。中通り側の母屋の使い方が難しい。キッチン、バスルームは改造して、やはり美術館側に小さな新築部分がないと、この計画は生きない。呼吸するガラスと土と木の壁の組み合わせかな。建具は全てアルミで。動く部分と動かぬ部分をハッキリと分離する。中庭部分は松とカエデだけを残してあとの樹木は整理する。床は瓦か。水が湧いていたから、浅い池を作る可能性がある。

再生技術職人育成センターを目指して、松崎町で小集会を企画

しても良いか。職人データベースは登録制で会費を取らなくてはならぬだろう。検索も幾つかのゲートを設計する必要がある。野村、松本の組み合わせか。

六月三日

昨夜は久し振りに西伊豆の旧友たちと会って、楽しい時間を過ごした。それでも二十二時にはホテルに戻ってすぐに寝てしまった。早朝五時半に露天風呂入浴。七時半朝食。八時森文現場。午前中は役場隣の関さんの蔵で過す。蔵は百五十年前のモノと言いが、造りはしっかりしていて、関さんによれば土佐の職人の手で左官仕事で成されたと言う。何処かに土佐じつ喰が使われていたのだろうか。江戸末の職人たちの活発な交通がうかがえて興味深い。

蔵の前の畑がちょうど世田谷村屋上と似たスケールで、実に様々な野菜が植えられていて、役場の職員に教えられたところでは、約十五種の野菜が育てられているとの事。いんげんは高く生い茂り地面に濃い蔭を落とし、つるの姿も美しい。一夏に大量の収穫が見込めると言う。きゅうり、なす、トマト、かぼちゃ、大根、すいか、パセリ、珍しいところではアスパラが植えられている。アスパラは三年間はダメだそうだが難しくはないらしい。世田谷村の屋上を野菜畑にする計画の具体的な類似例に出会ったというわけだ。やはり、水の問題は大きいようで、なんとか井戸水を屋上に上げられぬか再考したい。

菜園用の高床小屋も必需品であることを痛感した。松崎町を歩いて、野菜畑を幾つか取材した。

昼に森文実測を切り上げる。古建築の実測は学生に大きな勉強になるのは気付いていたが、院のプログラムにきちんと組み入れ

の方が良い。短い講評の後、午後一時散会とする。小林君のとこ  
ろでそばをいただいて帰京。二〇時過東京着。六月から、来年二  
月までの研究室プログラム作成を急ぎたい。

世田谷、N棟、S棟、九州、松崎、大きくは五セクションで、  
それぞれに独自のプログラムが必要である。スタッフに関して  
も、従来の設計事務所員の所員の如き立場はうまくないだろう。徹  
底したプロジェクト志向型のプログラムを作るが、要は能力才質  
がハッキリしない人間をどのように処するかが要であろう。

六月四日

朝の、のぞみで京都へ。

京都に着くまでに、私の院生のプログラムを作ってしまった。お  
世田谷に居る連中は問題ないと割り切っておくしかないか。二名  
程弱い女性がいるが、もうすこし辛抱してみよう。

N棟プログラム

オレゴン大学とのコンペ作成は最後までやらせる。良いモノ  
が出そうにないが仕方ない。

六月十一日までは森文実測図の作成。

六月十二日より夏休み前までは篠崎を頭にして、倉の再生計画  
に二名。森文の再生計画に六名。割りあてる。

夏休みは八月十五日〜九月一日まで全員何らかの形でSAG

A・早稲田バウハウスに参加させる。

九月初旬、必要が生じれば世田谷組とN棟組の入替えを行う。

九月は十一月末までの第二段階プログラムを組む。マスターコー  
ス2年は十月より修士論文、修士計画に取り組ませる。

二〇時一〇分、のぞみ京都発で帰京。

京都造形芸術大学の講義は冷汗モノであった。渡辺豊和が例に  
よって、誰にも紹介せず何の予備知識もなく、無防備にレク  
チャーを始めてしまった。二時間程のおしゃべりの中で、やたら  
に反応して面白がってくれるオジさんがいて、おまけに異常に頭  
の切れる司会のオジサンがいるナと思っていたら、それが何と、  
学長の芳賀徹であり、国際日本文化センターの山折哲雄であつ  
た。双方共に比較文学、日本宗教学の巨匠である。

聴衆にそんな人物がいるとも知らず、私は調子に乗って、山岳  
寺院論から、重源まで、ホラを吹きまくったわけで、穴があつた  
らもぐりたいの感は極まっていますのである。渡辺はチャンとそ  
ういう事は私に伝えなくてはいけないのだ。知らぬが仏の私がタ  
ダのバカである以上に、伝えぬ渡辺も、マヌケ以外の何者でもない  
のである。

が、しかし、そんな巨匠が会場に居ても、居なくても、私のレ  
クチャーは変え様が無かつたのかも知れないのだ。

これからは見知らぬ場所での講義には、念には念を入れ過ぎヨ  
の教訓を得ながら、東京に戻りつつあるのでアル。